

# 無礙の風

山田 喜敏

# 無礙の風

む  
い

げ

かぜ

この俳句の部の題名は、一九九〇年作の  
摘み終えし松や涼しき無礙の風  
より採った。「無礙」とは、  
仏教語で「とらわれがなく、  
自由自在であること」の意という。



先日の30周年の記念祭には失礼いたしました。どうやら体調も元に戻り何とか過ごしています。他事ながら安心ください。このたびは老人の戯言を少々記し、責めを果たしたいと思います。

室内で日向ぼっこをしていたら、隣家の飼い猫「すず」が、秋の日を浴びながらゆつたりと庭を通り過ぎてゆきました。我が家の中はこの猫のテリトリーらしく、様子確認のため一回りしている途中のようです。日ごろ見かけているのでこの日も「すず。すず」と呼びかけたのですが、聞こえているはずなのに声のする方を振り向きもせず歩み去っていました（静かな屋下がり老人と老猫の何とも気の抜けた状景を想像してください）。この雌猫は、仕草が可愛らしく、その上いつも悠然としていて、我が家のかとしたいと思つてゐるほどなのですが、この日も片思いのままで終わつてしまひました。

今我が家には犬も猫もいませんが、実は40数年ほとんど途切れることなく奉仕してきました。コリー犬（あの名犬ラッシャーと同種です）がいた時もありましたが、多くは雑種（今はミックス犬というそうです）でした。彼らを飼うようになつたきつかけは様々ですが、犬猫○○と言われるのもいやなので省くこととして、ここでは最後に飼つた「さち」と呼んでいた犬について書いてみます。

「さち」は、佐久川上村にしかいない川上犬という稀少犬で、一度は飼つてみたい犬でした。昭和63年我が家に来て、平成18年に19歳で彼岸に行つてしましました。19歳といふのは犬としては長寿です。19年の間にはいろいろありました。いいことばかりではありませんでした。ですが、いまでは、人間も犬もお互いに辛かつたことも含めて、私たち

ち夫婦には大切な伴侶であつたという思いが強く続いています。

しかし、私は犬を飼うこと、「さち」を最後にやめることにしました。

それは私たち夫婦が犬を飼つてもその最期を看取つてやれないからです。逆に私たちが犬に看取られることになるかもしれません。まことに寂しいことです。これは通さなければならないことなのです。たかが犬を飼うか飼わないかということに、通す・通さないというのは、他人には大げさに悲壯がつてゐることだと失笑されるかもしれません。しかし、現在の私には今後の全てのことを考えるときに基盤になることなのです。生きている間にできるだけ心身共にすつきりとさせておきたいと願つてゐるわけです。できること・できないことを考え、その判断を受け入れて静かに過ごしてゆきたいと思っています。

今これを書いているのは10月下旬ですが、我が家は広くもない庭（密かに「八重葎園」と呼んでいます）の木々も少しづつ色づいてきました。一時老人の目を慰めてくれることでしょう。

さて、この植木の中に「ブッドレア」というのがあります。この木のことは何も知らずに買って、居間から一番見える所に植えました。これが失敗でした。植えた年からどんどん茂って、後ろの木々を見えなくするは、日光を遮つて樹下の草花を絶やしてしまはで、散々なことになりました。

だが、この木にもいいことがありました。この木は夏から秋にかけて、10cmほどの花を一杯につけるのです。和名を「藤うつぎ」というように濃い紫色で、花だけ見るとまことに高雅な花です（源氏物語の紫の上を思つてください）。そしてこの花には、蝶を始めとしていろんな虫が集まつてきます。暑さの激しかった今年も蝶の舞う様を見て、涼しさを味わうことができました。

しかし、鳥羽を2回ほどしか見られなかつたのは残念なことでした。黄揚羽は数こそ例年と変わらなかつたものの、姿が小さく（これは気候以外の理由もありますが）、見られるようになつたのもお盆過ぎと、いつもより遅かったような気がします。蜻蛉に

も待たされました。9月過ぎになつて漸く姿を見せましたが、数は寥々たるものでした。百舌は飛んできますが、あんなにいた雀はほとんどみかけません。

こう書いてきたのは、地球の温暖化や環境破壊を言挙げするためではありません。そんなことは私の手に余ることであり、書くにはあまりにもありきたりだと言われるかも知れません。

鳥揚羽は艶やかに光る黒い羽根と優雅な姿に魅せられます。そう言えば前には開放された家中を鬼やんまが通り抜けていったこともあつたつけ。「止まればあたりに増ゆる蜻蛉かな」（中村汀女）という状景は、中村（私の住所）にもありました。前に書いた「さち」は、ひどいアレルギーを患つていて、痒さがひどくなると脚をなめ続け、皮がむけ血が出ても止めませんでした。私たちができることは獸医から処方された薬を飲ませることだけでした。

これらのことが復活して再び見たり接したりできることはないでしょう。いわば私の前から消えたものなのです。そんなものを思い出すのは幻を追うことだと思う人もいることでしょう。そう思われても仕方のないことです。

ですが、私には、今まで経てきた中ですっかり消えてしまい、心に蘇ることのないこのほうがずっと多いのです。これからは今思い出していることでも私から消えていくことがあるでしょう。私はその流れにまかせてゆくつもりです。自分から消えていくこと落ちていくものはそのままにして、なお残ることを大事にしてゆこうと考えています。心はすっかり瘦せてしまうでしょうが、清々しくもなるのではないかと淡い期待もしています。

時間は余るほどあるので本を読むこともあります。本も買ったままで手にしてないものがあるのに不足はありません。それでも理解することが何と遅くなつたことか、まあ嘆かずに脳とつきあっています。ここでは最近読んだ二冊についてかいてみます。

まずは、「偶然とは何か」（竹内 啓著、岩波新書）

最初に断つておくのは、私にはこの本の五分の一も理解できなかつたことです。高校

で確率を教わったのですが最初から全く分からず、大学入試で確率の問題の出題があつたらきっと合格できていなかつたでしょう。この本では確率についてのことが多く、そこはとばして読んだので、紹介するのは忸怩たるものあるのですが、まあ勘弁してください。（甘えの構造）

この本の著者は、著名な統計学者・経済学者だそうです。ところが合理主義一辺倒ではなく、不可知論の立場ではなく、簡単に宇宙の摂理（神）によらないところに、確率に全く弱い私でも近寄ることを可能にしてくれました。一言で言えば、人間主義（ヒューマニズム）が本書の根幹にあることが分かつたからでした。

本書で私は、「偶然」が人間・国際社会・歴史・自然等を成立させる大きな要因であることを知りました。それを基本に人間がいかに認識したらいいのかが小気味よく述べられています。やや長くなりますが一例をしめします。

「そこで重要なことは、歴史的事件がある国や民族の「本性」から必然的に生じたものとは考えない」とある。そのことは自国や自民族は本質的に「善」あるいは「優秀」であり、他国や他民族は本質的に「悪」あるいは「劣等」であるとする考え方を生み出すことになる。しかし歴史の経過の中でそのような国や民族の「本性」というのは空虚な概念であつて、歴史が多くの外的な偶然条件に左右されること、また多くの人々の決断や行動も歴史的条件に関する「無知」の下でなされたことを知ることは、歴史に関わる国、異なる民族の立場を相対化することに役立つと思つ。」  
(158 p)

しかし、われわれの認識の仕方として「偶然」をも受け入れることが、法則や神意を絶対視する「必然」の視点から私たちを解放してくれたことは事実でしょうが、この世界に起ることには幸運と喜べることもある一方で、戦争・事故・災害といった人間にとつて不幸をもたらすこともあります。「運」「不運」や「幸」「不幸」を「偶然」とのみ取ることを著者は「偶然の專制」と言つて否定しています。

著者は、「偶然の專制」とする考え方を解決するのは、人間の主体性を活かした想像力だと思います。運のよかつたものが不運な人に同情したり、より幸福を求めて賭をし

たりするのは、現実や未来を想像する人間のすばらしい能力だと言えるのです。一文を引用しておきます。（185P）

「人間の想像力は偶然というものの理解を可能にし、また偶然は想像力を刺激するのであって、それによって人生はより豊かなものとなるのである。」

次は、「流離譚上・下」（安岡章太郎作 新潮社）

これは大作です。作者が厖大な資料を収集して、幕末・維新・自由民権運動の時代を描いた歴史小説ですが、いわゆる大河小説とは異なっています。山内容堂・坂本龍馬・後藤象二郎・武市瑞山・吉田東洋・板垣退助等の土佐藩を動かした人物が出てきますが、土佐や高知の激動期の変遷を描くことは副となっています。主は、作者の先祖、安岡一族の様々な人生を描くことにあります。しかし、時代の変遷の中で自己の志を実現した人物を顕彰したり、逆に変遷に翻弄され滅んでいった人物を追慕したりするといった、作者の感情や、主観が強く感じられることはないのです。

安岡家は農民の出でしたが、経済力をつけて、土佐藩の郷士に取り上げられました。土佐藩の郷士というのは、農地や山林を所有する地主であり名字帶刀を許された武士でもありました。土佐藩の家臣は上士と下士からなり（郷士は下士）、その区別は厳格だったそうですが、詳しいことは省略します。「龍馬伝」などを想起してください。安岡一族は高知市外の一画に四軒の家が境を接しており、血統と四家を存続させるために、その間で婚姻や養子縁組を複雑に繰り返してきました。この一族の、明治維新をはさむ五代にわたる人々が小説に登場しています。農業經營に才を發揮し分家まで出した人や、農地は番頭に任せ自分は藩士として京都やいわゆる官軍の兵士として会津まで出征する人がいるかと思うと、生地を離れず家を守って一生を終わった人もいます。

こうした人々と彼らが関わった事件を、作者はつかず離れず淡々とした筆致で描いています。資料を大切にして叙述の正確さを心がけ、資料の欠けた部分は抑制された想像力を働かせて書くと言うことに徹しています。読後の清々しさはここから来ているものでしょう。そして登場人物に対して作者は理解と感慨をもつて書いていることがなんとなく伺えます。こうした能吏が明治政府にいたら征韓論などいう愚かな政争は避けられたのではないかとこつそり思っているのです。

ところで、この小説の副主題の一つとして、人生の終わり（年齢に関係なく）に近づいている人の故郷への回帰心があるようです。故郷への回帰心といえば、死の三日前に友人の賀古鶴所に口述筆記を依頼した森鷗外の遺言をおもいだします。「（前略）余は石見人森林太郎として死せんと欲す。宮内省陸軍皆縁故あれども生死分かるる瞬間あらゆる外形的取扱ひを辞す。森林太郎として死せんとす。墓は森林太郎の外一字もほるべからず。（後略）（原文はカタカナ書き、句読点はなし）」というのがそれです。ご存じのように森鷗外は石見の国津和野藩の藩医の息子です。この遺言については研究者たちのいろいろな考え方がありますが省略します。島崎藤村にも「（前略）血につながるふるさと」という言葉があります。

それでは、「流離譚」の中から、懐郷心に関わる話を紹介しましょう。

前に安岡一族の中で会津若松まで遠征した人物がいたと書きましたが、この人は安岡覚之助といい、本家を継ぐために分家から養子に入りました。この小説では、一族の中では藩士としては一番活躍し出世もしたようです。覚之助は土佐藩軍の小隊長として会津藩軍と戦って、他の兵士に替わって戦況を見ようとしたところ、敵の流れ弾に当たって死んでしまいます。作者はその死んだ場所をおとずれました。会津若松市のはずれの湿地帯でした。

「そんな中だだっ広いコンクリート舗装の道路が一本とほつており、トラックが時折り白い埃を巻き上げながら、走り過ぎて行く。それが越後街道であり、黒い泥のく

ずれかかつたドブのやうな川にかかるつてゐるのが柳橋であつた。

覺之助は本当にこんなところで死んだのだらうか？

私は文字通り絶句したまま、胸の中でむなしくそんな言葉をつぶやきかへした。き

けば、そのあたりは昔、処刑場のあつたところだといふ。しかし、この荒廃した風景をまえに、浮かんでくるのは処刑者でもない、戦死者でもない。ただ戦乱に血塗られた一個の屍体が眼の前に横たはつてゐるのが、白昼の日射しの中に見えてくる気がした。」（下271p）

やや主情的ではありますが、魅力の一端が分かつていただけたでしょうか。

作者は、坂本龍馬も暗殺される前には、無意識ながら「帰巣本能」が働き「本卦帰り」を目指していたかもしないとも書いています。作者は、「薩長同盟（同盟成立後、薩田注）を成立させた龍馬が、一転して武力倒幕を否定する大政奉還の運動を始めたときから」暗殺されるという龍馬の運命は決まっていたと言い、「天馬空を往くかの如き自由人」といわれる龍馬であるが、「自由人もまた流浪の生活に疲れれば、家郷をおもふはずである。しかも龍馬は、自由な野人ではあつたけれども、決して冷徹な個人主義者にはなれなかつた。」とみています。この小説で私の勤王派嫌いが変わつたわけではありませんが、龍馬を全面的に称揚する昨今の風潮を、苦々しく思つていた気持ちから、やや斜に見られるようになったのは事実です。

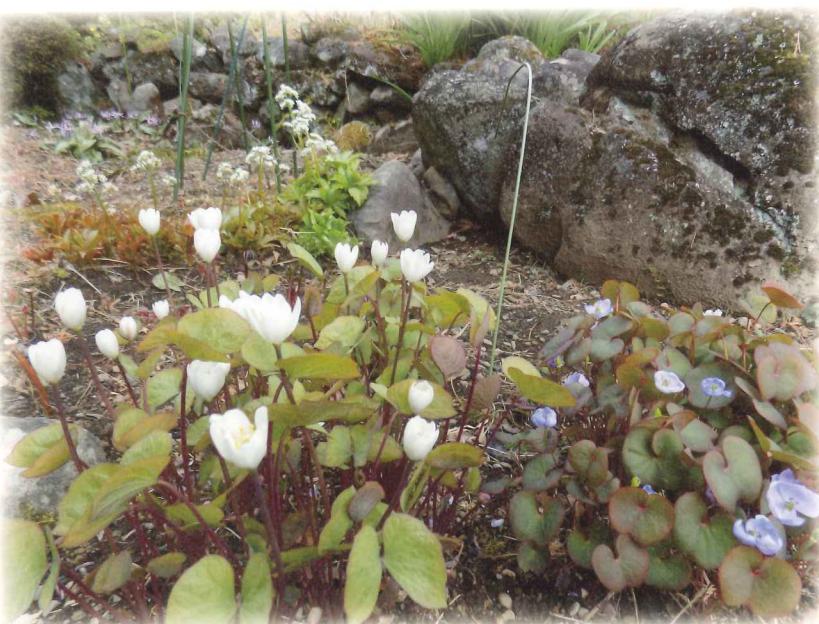
安岡一族の本家を継いだ養子の正熙（まさひろ）は、養家（本家）が没落していくためか、南国の高知から東北の福島県梁川に家を移します。距離にしては千キロを超えているでしょうか。彼は梁川で眼科医として繁盛したそうです。後に息子は役人として出世をしており、正熙は高知の親族などからは故郷を捨てたとは言われたでしょうが、家を立て直したと見ていいでしょう。

この小説は、正熙が故郷の知人に出した手紙をもつて終わります。彼はこの時脳溢血の後遺症を患い、手も不自由だったようです。

「（前略）ドーカシテ今世ニテ今一度、故郷ノ方々ニ御目ニ懸リタイト思ッテ涙に暮

レテ居マス。仮例え此身体ハ死シテモ、魂ハ故郷ニ帰ッテ皆様ニ逢ヒタヒト思ッテ居マス。私今少シ、ドーカシテ生キテ居テ、自分ノ目的ヲ達シ、伴正光ノ行末ヲ見届ケ、祖先ノ名ヲ揚ゲ度イト思ッテ居マス。（中略）古里に吾レまつ人もなからまし なに恋しくてぬらす袖かな（後略）」

長々駄文を弄してきました。お付き合いただき感謝申し上げます。末尾ながら、皆様のご健勝をお祈りしております。



## おわりに

平成27年1月に夫が旅立ちまもなく4年になります。

悲しみも、恋しさも、少しづつ日々の暮らしの中でやり過ごし、今は懐かしい思い出に  
変りつつあります。

そろそろ夫の教職人生のごく一部を、家族や、多くの教え子の皆さんに伝える事が出来ればと整理をしてきました。

決して几帳面とは云えない夫が、趣味の俳句だけは、すべて日付を入れ大・小5～6冊ほどのノートに残しておりました。私にとってはどの句も折々の夫の思いが感じられる、懐かしい日記のようなものでした。

俳句については教師になり、はじめての教え子であり、ご本人も教師でもあった水野強さんに1987年～1999年の間の中から約250句を選んでいただきました。  
夫は平成24年脳梗塞を発症したため、残された未整理の論文、その他は素人の私にはどうする事も出来ず、結局、深志高校在職中に掲載されたものあるいは、生徒に向けたメッセージ等、活字化されたもののみとしました。

旅好きで、自然を、特に花を愛した夫と二人、日本各地を旅し求めた花木や草花は、今、我家の庭にいじりを添えてくれています。

本文中に掲載した我家の庭や草花の写真は、諏訪実業高校の教え子の飯田玲子さんが四季折々訪れ、撮りためてくださったものです。

来春は私も傘寿を迎えます。

今は庭いじりをしながら、時折たずねてくださる皆さんと熱いコーヒーをいただきながらの会話が、何よりの楽しみになりました。

おりしも今夜は中秋の名月、四季折々の行事を大切にしていた夫のためにも、美しい満月が見られますよう、熱爛にすすきの一折を添えて祈りたいと思います。

今回の「無礙の風」出版にあたり水野強さん、飯田玲子さん、オノウエ印刷さんにはいく度となく足をはこんでいただきましたこと、心より感謝いたします。

山田紀子

やまだきとし  
山田喜敏略歴

昭和10年11月7日 岡谷市長地に生れる  
諏訪清陵高等学校  
東京大学文学部卒業  
昭和33年4月木曾西高等学校教諭  
諏訪実業高等学校、伊那北高等学校  
松本深志高等学校、富士見高等学校  
松本県ヶ丘高等学校、長野県教育センター  
定年退職  
平成20年頃より入退院  
大腸癌に脳梗塞を併発  
平成27年1月28日逝去 81歳

無礙の風 山田喜敏

平成三十年十一月発行

編集・発行

山田紀子

〒394-10088

長野県岡谷市長地梨久保二丁目一四一-三

印刷・製本

株式会社オノウエ印刷

〔高級画質(極精細ドット)印刷〕

〒392-100-15

長野県諏訪市中洲五八六

○二六六一五二一八〇二〇

FAX 〇二六六一五二一三〇五八